

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2003年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	法学	研究科	政治学	専攻
指導教員	所属・職名		氏名		
	法学部・教授		川崎 修 印		
自然・人文の別	自然	・ (人文)	個人・共同の別	(個人)	・ 共同 名
研究課題	英国における社会民主主義思想の展開 - 『社会政策の諸問題』と福祉政治				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	法学研究科・政治学・D4		山本 卓 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	法学研究科・政治学・D4		山本 卓		
研究期間	2003 年度				
研究経費	200,000 千円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、戦後福祉国家を支えた思想における健康の社会化をめぐる問題と関係する側面を捉えることを狙いとする歴史研究である。この狙いのもと、公式戦時民事政策史編纂企画の一環である R・M・ティトマスの『社会政策の諸問題』（一九五〇年）を取り上げた。その上で、この著作で戦時政策の事例の一つとして扱われる緊急病院サービスに関する議論を、近年公開された前掲書の編纂過程を知らせる一次史料と合わせて検討した。この検討を通じて、いわゆる戦後合意論の代表的著作の一つに数えられる事の多い『社会政策の諸問題』の議論に、保健サービスをめぐる当時の議論の中で少数派であった社会医学の観点からする現状への意思表示の側面が含まれていたことを明らかにする事を試みた。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[英国社会政策の理念史] [健康の社会化] [国民保健サービスをめぐる政治]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では以下の四つの論点のうち、主として最初の三つに対して検討を加えた。

① 『社会政策の諸問題』の著者が念頭に置いた保健サービスの考え方の当時の文脈における特徴

本研究ではこの問題との関連で、『社会政策の諸問題』(以下『社会政策』)と英国政治経済学図書館が Titmuss_ADD_1 の分類で所蔵する文書を分析した。なお ADD_1 には『社会政策』の企画における緊急医療サービス(EMS)関連の作業過程の様子を知らせる文書(他の編纂グループが発行した中間報告書や内容面に関する意見交換の書簡)が所蔵されている。これらの文書の分析から EMS に関する『社会政策』の叙述は、その成果は当時では非公開ながら、先行して進められていた戦時医療政策史編纂グループがまとめた情報に多くを依拠していたことが明らかになった。また『社会政策』の叙述を特徴づける、戦時に達成された保健サービスの社会化を進歩と見なし、且つ戦後社会に継承された成果としてこれを捉える歴史観も(彼が参照したと考えられる)遅くとも一九四三年時までに記された資料において比較的広く見られたものであった。その一方で、上述の事実は戦時医療政策史編纂グループの EMS 論との比較で、『社会政策』の著者であるティトマスの保健サービスの考え方の特徴を浮かび上がらせる考察上の観点をもたらした(同じ情報を元にティトマスは何をどの様に語っているかに注目する観点)。この観点に立つ医療政策史編纂グループの議論との比較から、『社会政策』の EMS 論が当時の文脈で持つ次のような特異性が明らかになった。すなわち、一方の医療政策史編纂グループの EMS 論では、EMS の施設サービスに主要な関心が集中する傾向にある。また進歩の概念は、既に医学的な定義が与えられている問題の治療、予防に関する効率性が基準となっている。これに対してティトマスの議論では、EMS の施設サービスが施設外の保健福祉サービスと連携する側面が相対的に重視されている。同時に、疾病とは次元を異にする心身的な健康の観点に立った上で、そうした健康状態の攪乱要因の形態や規模、傾向を予測する知としての「ストレス計算」に基づいてサービスを編成する側面が EMS で見られた点が、保健サービス分野における進歩の内実と見なされている。本研究では、医療政策史編纂グループの議論との比較で浮かび上がるこれらの特徴を、『社会政策』で示される保健サービスの考え方が当時の文脈で持っていた特異な点として理解した。

② ティトマスが考える社会医学の理念と、その『社会政策の諸問題』で示される保健サービスの考え方との関係

本研究ではこの問題との関連で、Titmuss_ADD_3 に分類される文書の分析を主に行った。なお上記の史料はティトマスが医療評議会の社会医学研究部で行った研究に関するものである。また分析対象とした史料には、いずれも一九四〇年代末から五〇年代初頭にかけてティトマスらが同研究部で進めた、幼児死亡率研究の企画と国民保健サービスにおける GP サービスの評価研究の企画に関連した資料が含まれている。これらの資料に対する分析が明らかにしたティトマスが考える社会医学の理念の主たる特徴は次の二点に整理できる。すなわち、人々の健康状態をその生活条件との関係で捉える視座に立った上で、人口レベルで健康状態に関する特性を捉えて個人に働きかけようとする点と、疾病の原因となっている環境要因を公衆衛生統計とソーシャルワーカーの活動を通じてもたらされる人々の生活情報に基づき特定しようとする点である。その一方で、GP サービスの評価研究に関する資料の分析からは、上記の点を特徴とする社会医学の理念が保健行政の問題に関しては次のような考えに立っていた点が明らかになった。すなわち、社会医学の枠組みを通じて捉えられる疾病や一定水準を下回る健康状態は、(政策的に対処されるべき)「ニーズ」の概念を用いて表現される。その上で、ニーズの規模や性質に基づき、地域の社会サービスを総合的に編成しよ

研究成果の概要 つづき

うとする考え方である。なお、こうしたニーズの概念に基づく保健行政の観念は、『社会政策』では戦争被害の規模や形態を算出する「ストレス計算」と呼ばれた知が、職業や地域別に区分された統計上の階級の健康に関する傾向を科学的に予測することを目指す社会医学によって置き換えられる構図になっている。その一方で、ティトマスが「ストレス計算」と呼ぶ考え方に基づく行政編成の原則は、実際の戦時政策では病院や疎開といった個別の施策分野に関して適用される傾向にあった。これらの点から、本研究では、『社会政策』を特徴付ける医療サービスの考え方と社会医学の関係という問題に対して、前者の考え方は社会医学のそれを下敷きとする側面を持つと同時に、社会医学に基づく医療サービスの理念は戦時の事例を念頭に置いて形成された側面を持っていたと結論づけた。

③ 国民保健サービスをめぐる政治の文脈における社会医学の位置

この問題に関して本研究は、一九四〇年代における国民保健サービス（NHS）をめぐる政治と社会医学の関係を、主として保健行政の次元で明らかにすることを試みた。上記の関係の展開を明らかにすることを目的とする作業として、具体的には社会医学の支持者たちが関与した機関であるナフィールド地方病院基金と省庁横断委員会に注目し、これらの機関の活動をそのNHSをめぐる問題との関係という観点から分析した。その結果、一九四〇年代におけるNHSと社会医学の関係を大きくは次の三つの局面を持つものとして捉える視座が得られた。すなわち第一は、EMS及び関連サービスの戦後社会における発展的存続をNHSの形で実現する為に戦前の改革派勢力の間の結末が進んだ中で、地域主義（地域の保健サービス供給主体間の協調関係に基づいて大学病院を中心とする地域保健サービス網を構築する考え方）の実現を目指す立場を示した局面である（一九四〇年代初頭から四三年）。また第二は、創設が既定路線となったNHSのあり方をめぐって医業集団内外での利害対立が先鋭化した状況下で、社会医学の理念に基づく専門職集団間の協調的分業関係の形成を図ろうとした局面である（一九四四年から七年）。最後に第三は、NHSの三層構造が明らかになった状況下で、一方で、社会医学の理念に対する理解の相違が臨床派による社会事業、公衆衛生派の牽制という形で表面化し、また一方で、地域ケア体制の整備に関心が高まって行く局面である（一九四八年以降）。なお、ここで言う三層構造とは、NHSを構成する病院サービス、一般医療サービス、地域福祉サービスという三つの保健サービス部門がそれぞれ独自の指揮系統、論理のもとで施策を展開する構造を指す。

④ 『社会政策の諸問題』に見られる保健サービスの考え方のNHSをめぐる政治の文脈上での位置

この問題について本研究では、今後の研究で採用すべき分析方法を設定するにとどまった。すなわち、①で検討したティトマスのEMS論で強調されている要素と（歴史的事実の叙述を離れて）戦後社会がその遺産を引き継いでいるとされた要素を、NHSを構成する三つの施策分野である病院サービスと一般医療サービスそして地域福祉サービスとの関係に分けて捉え直す。その上でまず、一方で、②の検討に基づきティトマスが『社会政策』の刊行以前に社会医学の観点から示したこれら三つの分野のサービスの理想像を検討する。また一方で、当時ティトマスが理解していた保健サービスの問題状況と照らした際に、上記の関係で捉えた『社会政策』の議論が持つ含意について検討する。次いで、上記の理想像と含意の関係を③で検討したNHSをめぐる政治の文脈での意味合いという側面から検討する方法である。

※ この（様式2）に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（A4縦型横書き1枚・自由様式）を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版者、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

なし